

学校名	さいたま市立神田小学校	執筆者名	中村 誠
研究タイトル	子どもたち一人ひとりのWell-beingを実現する学校づくり ～自立して協働する子を育てる～		

① 育てるべき資質や能力・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。(1 ページ程度)	
主に育成すべき資質/能力のキーワード	・粘り強く立ち向かう ・臨機応変 ・没頭できる ・良好な関係を築ける ・人生の意義や目的をもつ ・達成感をもてる ・新たな価値を創造する

I これからの未来を担う子どもに必要な資質・能力

予測不可能な時代と言われる昨今、これからの未来を担う子どもたちに必要な資質・能力は、以下の5つであると考ええる。

- (1) 今までに経験したことのない困難にも、前向きに捉え粘り強く立ち向かえる力
- (2) 想定と違っていても、自ら調整して臨機応変に対応し没頭できる力
- (3) どんな相手とでも、よりよい関係を保つことができるコミュニケーション力
- (4) 「意義や目的」と「手段」を分けて考え、何のために取り組んでいるか見直せる力
- (5) 目的を達成するために、新たな発想や価値を創造する力

令和の時代に入り、私たちは新型コロナウイルスの感染拡大を経験する中で「当たり前が当たり前でない」ということを学んだ。また、世界の不安定な情勢や日本社会における少子高齢化を鑑みても、これからのを生きる子どもたちへの期待と負担は大きいといえる。そうした状況下で、これから先、私たちが考えにも及ばないような事態になっても、生き抜くことができる子どもを育てていくためには、子どもたちが Well-being な状態となることが必要であると考え。Well-being とは、世界保健機関（WHO）において、「肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態」と定義され、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など、将来にわたる持続的な幸福を含む概念とされている。これまでの学習指導要領においても、子どもたちの「生きる力」を育むことを目的とされていた。しかし、「生きる力」とはどのような力なのだろうか。私は、子どもたち自身が、全てが満たされている Well-being な状態を保っていることで、はじめて「生きる力」を育んでいけるのではないかと考える。子どもたちが未来に向かって自身の幸福を追求できるための素地を育むため、「子どもたち一人ひとりの Well-being を実現する学校づくり」を研究テーマと設定した。

Well-being の概念としては、ペンシルベニア大学心理学部教授のマーティン・セリグマン博士が「①ポジティブな感情 ②何かへの没頭 ③人との良い関係 ④人生の意義や目的 ⑤達成 の5つの要素を満たしている状態が Well-being な状態を保たれている」と論じている。

私は、以上にある Well-being の5つの概念を柱にして、これからの未来を担うために必要な5つの資質・能力を設定することとした。

② **子どもたちの現状**・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握し、収集した確かな情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。（1～2 ページ程度）

2 本校における子どもたちの現状

本校は、郊外に位置し昔ながらの雰囲気が残る地域である。何世代にわたって住まわれている世帯が多くあり、他の地域から移住する家族はそれほど多くない。地域の皆様は、気さくな方が多く、いつでもどこでも皆が元気に挨拶を交わし合っている様子が見られ、「みんなの地域」という印象が強い。そのため、子どもたちもとても純朴で、誰に対しても分け隔てなく、毎日を元気に過ごしている。

令和5年度および令和6年度の全国学力・学習状況調査における「質問調査」では、「自分には良いところがあると思いますか」との質問では、「当てはまる」との回答をした子どもが、全国平均よりも、どちらの年も5ポイント以上上回っていた。また、「人が困っているときに進んで助けていますか」「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」との質問に対し、「当てはまる」との回答をした子どもは、どちらの年も全国平均より15ポイント上回っていた。

子どもたちがそう感じられている背景としては、教職員のみならず、地域や保護者が、子どもたちの自己肯定感を育んでいこうとしているからであると考えられる。全国学力・学習状況調査における「質問調査」において「先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思いますか」との質問で、肯定的な回答は令和5年度では全国平均とほぼ同じ回答率であったのに対し、令和6年度は、7ポイント上回っていた。また、令和5年度に行なった本校の学校評価の保護者アンケート結果においては、「先生方は、子どものよさを見つけ伸ばそうとしている。」という項目で、実に90%以上の保護者が、肯定的な回答をした。児童アンケートについても同様の質問項目で、同じく90%以上が肯定的な回答をしている。

以上のことから、保護者・地域・学校が一体となって、子どもたちの良さを伸ばし、認めていく中で、自己肯定感が高まり、誰かのためにも役立っていこうとする姿勢をもってすこやかに育ってきているのではないかと考える。

子どもたちの自己肯定感が高まっていることで、学力面においても成果が見られるようになっていく。令和5年度と令和6年の全国学力・学習状況調査の結果を比べると、令和5年度は、国語・算数共に全国平均を3ポイント下回っているが、令和6年度においては、国語は全国平均を6ポイント上回り、算数は全国平均と同様の結果となっている。特に国語では、「話す・聞くの」の内容において目的に応じて伝え合うことへの問題で全国平均よりも12ポイント上回っていた。令和5年度の「話すこと・聞くこと」の内容にかかる問題はすべて全国平均を下回っていたので、この1年で大きく向上したと考えられる。また、「質問調査」においても「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」との回答で、令和5年度同様の質問項目は全国平均と同等であったのに対し、令和6年度は全国平均よりも11ポイント上回っていた。子どもたち自身が、話し合ったり伝えたりする活動から自分の考えを深めることができていると実感していることが調査結果としてあらわれている。これは、子どもたちの自己肯定感が高まっている中で、学力にも反映してきたのだと考えている。

本校では、「人間性豊かで 21 世紀をたくましく生きる 神田の子」という学校教育目標のもと、「神田小の誇りは「明るい笑顔」と「元気なあいさつ」」「すべては神田の子の『希望をはぐくむために』」との 2 つの理念をもって日々の教育活動に励んでいる。代々受け継がれてきた学校教育目標と 2 つの理念は、子どもたちの人間的な成長に重点を置いている。学力としては、全国平均と比べ決して高くはないが、日々の生活の中で保護者・地域・学校がからの支援による幸福感が高いと考えている。

一方、本校の子どもたちにおけるこれからの課題も見られた。全国学力・学習状況調査の質問調査において「算数の解き方がわからない時に、あきらめずにいろいろな方法を考える」との質問で「当てはまる」との回答率が、全国平均より約 5 ポイントも下回っている。その証拠に、算数の問題において「グラフや表を読み取って解き方を考えて解く問題」については、どちらの年も正答率が全国平均よりも 6 ポイントも下回っている。

以上のことから考えてみると、本校の子どもたちには、自身が想定できていない状況になると主体的に捉え粘り強く問題を解こうとする力と、そのために必要な思考力に課題であるといえる。ちなみに、質問調査において、「算数は好きですか」との質問で、「当てはまる」との回答率についても、どちらの年でも全国平均を下回っている。当然ではあるが、興味をもっているか、または好きかどうか学力にもつながっていると考えられる。そして、「どうやったら解決することができるのか」と前向きに取り組む姿勢が必要なのではないかと考えている。

こうした、本校の子どもたちの実態を踏まえ、5 つの資質・能力を育てる方針を定めていく。

③ 教育支援の方針・・・子どもたちの現在の状況を踏まえ、過去の実践経験や知見（失敗）なども加えて、教育支援の方針を記述する。（2～3 ページ程度）

本校の子どもたちは、地域の大人たちに見守られながら自己肯定感をもって生き生きと育っている。しかしながら、これから社会に出た際に自分が考えもしないような状況に陥った時に、どのように乗り越えていくか、その基盤となる「考える力」や「粘り強さ」には課題が見られている。先にも述べた通り、Well-being な状態とは、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など、将来にわたる持続的な幸福を含む概念とされている。子どもたち自身が幸福だと感じていてもそれはまだ短期的な幸福（happiness）でとどまっているのではないかと考えている。「難しかったけど頑張ってこの問題を解くことができた！」「みんなで話し合って、意見のぶつかり合いもあったけどクラス全員で納得する答えを見つけることができた！」などの何かの達成を通して得られる幸福感（Well-being）をもっとたくさん味わって大人になっていってほしいと強く願っている。そのためにも、子どもたち一人ひとりの Well-being を実現する学校づくりを推進していきたい。

本校の教職員は、現在の子どもたちや地域の状況を鑑みて、今年度より学校課題研究のテーマを「自立して、協働する子を育てる」とした。自立と協働は一見真逆のように考えられるが、自らが主体的に考え行動する中で、ふと友達とのかかわりで自分の考えを広げていくことができるように、とても深い関係性があると考えている。「自立」と「協働」を別々に考えるのではなく、自立する心をもって協働的に学んでいる状況や協働的な学びを通して自己の自立につなげていく状況などを研究し、授業に還元していきたい。そのため、本教育計画の副題を学校課題研究のテーマとな

る「自立して、協働する子を育てる」とした。そして、これからの未来を担う子どもたちに必要だと考える5つの資質・能力に自立と協働を設定すると以下ようになる。

- (1) 今までに経験したことのない困難にも、前向きに捉え粘り強く立ち向かえる力〔自立〕
- (2) 想定と違っていても、自ら調整して臨機応変に対応し没頭できる力〔自立〕
- (3) どんな相手とでも、よりよい関係を保つことができるコミュニケーション力〔協働〕
- (4) 「意義や目的」と「手段」を分けて考え、何のために取り組んでいるか見直せる力〔自立と協働〕
- (5) 目的を達成するために、新たな発想や価値を創造する力〔自立と協働〕

以上の5つの資質・能力を育成するための方針を、私の経験を踏まえ説明していく。

(1)「今までに経験したことのない困難にも、前向きに捉え粘り強く立ち向かえる力」を育むために 〔自立〕

人は誰でも、経験したことない出来事に遭遇したら戸惑うものである。ましてや、それが困難と言えるようなマイナスなイメージをもつ出来事であればなおさらだといえる。そうした困難な状況でも前向きに捉えて粘り強く立ち向かうことができる力を育てていきたい。そのためには、**今までの経験を今の状況につなげられる思考力**を育てることが必要であると考えます。

私が、過去に理科の授業で「生物の間には食うと食われるという関係がある」ということを学ぶ内容を行う際、学校の近くにある池から小魚（クチボソ）やエビなどを捕まえて提示した。子どもたちは、教室内でメダカを飼育していた。授業では、近くの池から捕まえてきた小魚と小エビが入った水槽を前に提示し「みんなが育ててきたメダカは、定期的に餌をあげているね。でも池にいた魚や小エビは誰からも餌をもらっていない。どうやって生きているんだろうね。」と子どもたちに投げかけた。「なんだろう？」と思う子もいれば、知識として知っていて「プランクトン！」と言う子もいた。「プランクトンって何？」という「プランクトンはプランクトン」としか言えない。つまり、プランクトンが何かということを本当の意味で理解していないと考えられる。そうした子どもたちとのやりとりをしていく中で、「自然で生きている生き物は何を食べているのだろうか」という問題を子どもたちと作り、それぞれが予想をしていった。予想していく中で、児童Aがカマキリの話をしてきた。「カマキリは自分より小さな虫を捕まえて食べている。だから、池にいる魚も自分よりも小さな魚やエビを食べていると思う。」この言葉から、子どもたちの意識が「小魚よりも小さな生き物」に着目し、自分たちの予想を深めていった。そこで、実際に池の水を見せ「この水の中に生き物がいると思う？」と問いかけたら「小魚よりも小さいんだからいるかもしれないね。」「いや、いないよ。見えないもん。」と様々だった。児童Aはいるはずと言っていた。予想を確かめあった後、顕微鏡を使って観察して生き物がいるかどうかを確かめていった。

この授業の時のように、今まで考えてきたこともないようなことを考えながら、児童Aのように問題に対して自身の今まで経験から考えたように、**今までの経験を今の状況につなげられる思考力**を育てることで、困難な状況を前向きに捉えられる感性を育てることができるのではないかと考える。

教育活動の中で「これってどういうことだろう？」と考え、**今までの経験を活かせる支援**をしていくことができるよう、授業のスタイルやカリキュラムの編成を考え改善していきたい。

(2)「想定と違っていても、自ら調整して臨機応変に対応し没頭できる力」を育むために(自立)

トーマス・エジソンの有名な言葉に「私は今までに一度も失敗をしたことがない。電球が光らないという発見を今まで二万回しただけだ。」とある。この言葉は、「失敗した」とマイナスな捉え方をするのではなく、「このやり方では達成できないことがわかった」と、もう一度挑戦するために前向きに捉えるための考えだといえる。私自身、理科の授業をしていた際、この言葉を引用して子どもたちに指導をしていた。例えば、ある実験をしている際、その実験の結果が、自分たちの予想と異なり納得をしていなかった時、子どもたちはどうしても「失敗した」と思いがちである。その時、私は「失敗ではなくて、このやり方では自分たちの予想をたしかめられないということかもしれないよ。」と言って、何か改善策がないかを考えるようにさせていた。そして、時間の許す限り再実験できるよう配慮した。もちろん、時間がなくて再実験をすることができない場合もあるが、その時でも必ず改善策は考えさせるようにしていた。理科の実験というのは、時にはデリケートで、方法をしっかり考えていても小さな誤差が生じ、想定していた結果にならないときがある。その時に、ただ「失敗した」と思わず、「このやり方ではうまくいかないから違うやり方を考えよう。」と思わせることは、子どもたちが主体的に問題解決する大事なポイントだと考えていた。これは、理科という教科に限ったことではない。これからの時代には、子どもたち自身が何かに取り組んでいる際、想定もしない状況になった時に「もうだめだ」と諦めてしまうのではなく「他に方法があるかも」と自ら調整して臨機応変に対応することが求められると考えている。そのような「トライ&エラー」を繰り返して没頭できる力を育てていきたいと考えている。そのためには、基礎的な学力の定着とそれを活かした探究力が必要であると考えている。想定と違っていても、自ら調整して臨機応変に対応し、没頭できる力をそだてていくため、子どもたちの6年間の発達段階を踏まえ、基礎学力の定着と探究力の育成をバランスよく育てるためのカリキュラム再構築をしていきたい。

(3)どんな相手とでも、よりよい関係を保つことができるコミュニケーション力」を育むために(協働)

子どもたちが Well-being な状態となることは、決して自分だけが幸せでいいというわけではない。自分も含めた他者も幸せな状態であることが本当の意味での Well-being な状態ではないかと考える。そうすると、子どもたちがどのような相手とでもよりよい円滑な人間関係を保つことが必要である。学校生活では、集団で生活するため全てが思い通りにいくわけではない。むしろ思い通りにいかないことでも円滑な集団生活をするために必要な場合もある。好んで話ができる人や話すのが苦手な人とでもよりよい関係を保つために、子どもたちがコミュニケーション力をもつことはとても大切なことだと考えている。そうした、どんな相手とでも、よりよい関係を保つことができるコミュニケーション力を育むために、誰一人取り残さないための合意形成が図れる場を多く設定していきたい。

例えば、学級内で何かを決める際、よく多数決を用いて決定するが、多数決を用いると採用されなかった少数派が取り残されることとなる。その少数派の人たちも取り残さないような合意形成をするために、学級内で価値的な対話を重ねていかないといけないと考えている。みんなが納得できるまで話合える雰囲気や、子どもたち自身が「ここまでだったら妥協できる」という価値観をもって合意形成を図れる話し合いを、授業や学校生活を通して行っていきたい。また、これからの子どもたちが、多様性を認める世界をより一層構築できるように「誰一人取り残さない」という価値観を育てるための道徳教育にも力を入れていきたい。

(4)「『意義や目的』と『手段』を分けて考え、何のために取り組んでいるか見直せる力」を育むため**(自立と協働)**

人は、何かに取り組んでいる時、その内容ばかりに気を取られてしまうと取り組むこと自体が目的になってしまう場合がある。いわゆる「手段の目的化」である。例えば、最近話題となる学校生活における校則で頭髮の規則があった場合、「なぜ頭髮の管理までしなければならなかったのか？」ということが置き去りになり、頭髮の管理をすること自体が目的となっているため、校則が変わらないということが考えられる。そうした、何かに向けて取り組む時、意義や目的をしっかりと考え「何のために取り組んでいるのか」見直せる力を育んでいきたい。

理科における問題解決の流れに例えると、実験をしている時に「なんのために実験をしているのか」ということが理解できていないと実験の結果と考察が混同してしまう場合がある。そのため、私が理科の授業をしていた時は、実験の結果は「事実」のみで、考察では「結果から何がわかったのか」を書くよう指導していた。また、結果から何がわかったのかということも、子どもによっては記述する方向がズレてしまう時があるため、考察をする前に必ず「問題」に立ち返るようにも重ねて指導した。そうすると、子どもたちが「そもそも、どのような問題を解決するためにこの実験をしたのか」という意識に立って考察をすることができるからである。この意識づけは、様々な教科で学ぶ時にも必要であると考え。学級で何か意思統一をする時、学校で何かに取り組んでいるときに「何のためにやっているのか」を考え取り組むことで、よりよい教育活動が行えると考え。教科指導のみならず、様々な教育活動のなかで意義や目的を考え意識することができるよう指導・支援方法をデザインしていきたい。

(5) 目的を達成するために、新たな発想や価値を創造する力**(自立と協働)**

(4)の資質・能力とつながるが、「目的」と「手段」を明確に分けることで、目的の達成のために主体的に行動できると考えている。また、何かに取り組む際、(1)の資質・能力にある経験したことのないことへ前向き捉え行動し、(2)の資質・能力にある想定しない状況で臨機応変に調整し、時には(3)の資質・能力にある、目的達成へ向けてよりよい人間関係の中で取り組むことが必要であるとも考える。こうした、(1)から(4)の資質・能力を育む過程で、子どもたちは、目的の達成へ向けて今まで自分が考えてこなかったようなことも発想できるのではないかと考える。

子どもの新たな発想には、私たちには想像もできない無限の可能性があるといえる。その無限の可能性をさらに広げていくために、子どもたちの発想を認め、新しい価値が創造できるよう、指導・支援の在り方やそのための環境づくりを行っていきたい。

私が理科の授業をしていた際、問題解決の流れの中で「予想」に関しては、決して否定することがないようにしていた。予想は、問題に対し子ども自身がはじめにもつ考えである。教師はその問題に対して答えを知っているため、正解へ向けさせたいようになるために子どもの予想を否定してしまう場合があるが、私は子どもが考えた大事な予想なので尊重すべきであると考えている。子どもたちが自分の考えをもって予想することで、それを確かめる実験方法で様々な発想が生まれ、より主体的な授業展開となったことを多く経験した。この経験から、子どもの考えを大事にして、認めながらも、問題の解決へ向けて主体的に取り組めるよう、教師の温かい指導と支援ができるようにしていきたい。

④ **実行計画と準備状況**・・・「③教育支援の方針」をもとに、自分が「いつ、何を、どのように行うのか」を具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。（3～4 ページ程度）

具体的な工夫のキーワード

・自ら学びを選択 ・カリキュラムマネジメント ・認める ・励ます ・支える

教育支援の方針に基づき、子どもたち一人ひとりの Well-being を実現するために、以下の計画で実施していく。

（１）自ら学ぶ方法を選択し、前向きに取り組むことができる授業づくり

資質・能力の１つである「今までに経験したことの新しい困難にも、前向きに捉え粘り強く立ち向かえる力」を育むために、今までの経験を活かしつつも自ら学ぶ方法を選択し主体的に授業に取組めるような仕組みを作っていく。

算数「数と計算」のわり算で例えてみる。それぞれの学級において子どもたちの実態は、わり算について理解して次の学年の内容まで理解できそうな子もいれば、わり算の概念を理解できず掛け算や足し算・引き算から定着をさせないといけない子もいる。そうした様々な実態がある中で、各学級で一斉授業を行っても、子どもたちには、前向きに取り組むことはできない。そこで、２つの学年を全体として時間割を合わせ「じっくり教えてもらうグループ」「教科書や動画を見てひとりで取り組むグループ」「友達で教え合うグループ」「どんどん問題を解いていくグループ」に分け、自分に合った勉強法を選択して取り組むことができるようにしていきたい。子どもたちは、何が自分に合った勉強法なのかを見つけ、学習に取り組む過程を大事にすることができるようになることで、経験したことのない出来事や困難においても、自分に合った解決方法を見つけることができるのではないかと考えられる。

まずは、今年度中に校内でカリキュラム編成会議を開き、実施可能な教科や単元を洗い出していく。そして、実施が可能な教科や単元を決めることができれば、該当する学年で時間割を一緒ににし、どのようなグループ分けにしていくかなど、次年度実施へ向け準備を進めていきたい。その際、学習面で効果が出そうな内容を精選するのであるが、もし、実施をして大きな効果が得られなそうにないを判断した場合は、随時グループ分けを変更するなどの臨機応変な対応ができるよう想定しておく。

（２）発達段階を踏まえて基礎学力の定着と探究力を育成するためのカリキュラムマネジメント

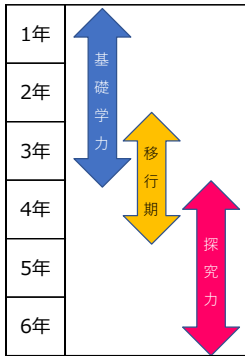
資質・能力の２つめとなる「想定と違っていても、自ら調整して臨機応変に対応し没頭できる力」を育むために、子どもたちの６年間の発達段階を踏まえ、基礎学力の定着と探究力の育成を目指して、カリキュラムマネジメントを行っていききたい。自ら調整して、臨機応変に対応する力は、子ども自身の基礎学力の定着がポイントであると考えている。例えば、想定と違っていても基礎学力として様々な引き出しを自ら持っていなければ臨機応変に対応することはできない。臨機応変に対応できる力の基盤として基礎学力は絶対に欠かせないものであると考える。そして、基礎学力が定着されていることを前提として、探究心を育む授業を展開していきたい。

＜3・4年生での実施例＞

実施時期 6月中旬（16時間）

第3学年 数と計算（わり算）	第4学年 数と計算（わり算）
わり算 あまりのあるわり算	わり算の筆算（１） わり算の筆算（２）

※4年生においては、これに8時間分をプラスして「わり算の筆算」のまとめとしての授業を行う。



まずは、小学校6年間で「基礎学力定着期」「移行期」「探究力育成期」の3つに分ける。基礎学力定着期となる1年生から3年生においては、学力の基盤となる「読み・書き・計算」に重点を置いて授業を行っていくこととする。3～4年生は、探究力育成期への「移行期」として(1)で説明した授業や探究にかかる授業内容を段階的に取り入れていきたい。また、さいたま市では、総合的な学習の時間の一部の時間で「STEAMSTIME」という時間を設定し、プログラミング的思考や創造性を養うための授業が設定されている。例えば「紙の形や折り方を工夫して丈夫な橋を作ってみる」「形や素材を変えてどこまでも遠くまで飛ぶ紙飛行機を開発する」「マシュマロを人間に例えて宇宙服をつくる」など、大きな課題へ向けて、解決する方法を自ら探究する創造性を育むカリキュラムや「人々に役立つ道具をプログラミングする」「自動で動くロボットをプログラミングする」など、プログラミング的思考を育むカリキュラムがある。3年生段階では、基礎的なものを行うが、6年生になると課題も高度なものになっていく。そのため、3・4年生の移行期では、基礎学力の定着をするとともに「STEAMSTIME」で段階的に探究的な学習を取り入れ、5・6年につなげていきたい。なお、時間割については、午前中の時間割で、なるべく基礎学力定着の内容となる授業を展開し、午後に探究的な学習を体験できる時間とするなど基礎学力を定着する時間と探究力を育む時間を区別するよう工夫をしていきたい。



活動について	
対象	小学3年生～6年生
時間	3時間
さいたま市STEAM教育で育成をめざす資力・能力	☐ 問題を分析する力 ☐ 整理立てて思考をまとめる力 ☐ あきらめずに挑戦する力
STEAM教育との関わり	Science Technology Engineering Art Mathematics Sports

「STEAMSTIME」の内容(創造性を育むPBL)

そして「探究力育成期」となる5・6年生では、「STEAMSTIME」で内容を充実させて実施するとともに、理科や算数などでプログラミング的思考を育みながら探究できる時間を設定していく。例えば、6年理科における「電気の利用」では、電気を効率的に利用するためにセンサー等を使用してプログラミングを体験する時間が設定されている。本校では、教科書に書いてある教材でもある「MESH」を使用して、効率的な電気の利用方法を考える時間を設定し探究活動を行っていく。その他、各教科においては、大きな課題に向け自分自身で学習方法を決め探究していくような授業スタイルとしていけるよう工夫していく。

以上のような授業を設定するには、学校全体で検討してカリキュラムを編成していくことが必要となる。運営委員会等での提案や、教務主任との調整を行い、次年度に可能な限り調整して実施を可能にしていきたい。

(3)「誰一人取り残さない」を合言葉に、合意形成を図る力を育てる道德教育と特別活動の推進

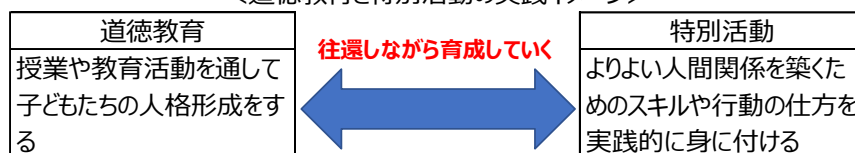
資質能力の3つめとなる「どんな相手とでも、よりよい関係を保つことができるコミュニケーション力」を育むために、「誰一人取り残さない」という言葉のもとで合意形成を図る力を育てることができるよう道德

教育と特別活動に力を入れていきたい。何かの意思決定を行う際、「誰一人取り残さない」ということを実現するのは難しいと考える人も多いであろう。しかし、多数決等によって少数派の人が納得していない状況で意思決定がされるというのは、やはり好ましくないと考える。なぜなら、その納得がいけないという気持ちが負の連鎖をうみ良好な人間関係とならない場合が多いからである。例えば、「本当はこっちをしたかったのにできなかった。だから僕は心から応援できない。」「納得いってないから学校に行きたくない」という現象が起きてしまう可能性がある。そこで、もし「何が大切か」を柱に話し合い合意形成ができているようなら「自分の思っていたこととは違うけど、よくよく考えるとそっちでもいいかと思う。」「本当はこっちをしたいけど、全体の実態を考えると、それは自分だけがいいと思うことだから、みんながいいと思うことにしよう。」という気持ちで、前向きに捉えて進むことができる。すべての人が納得する合意形成を図るために、その力の育成を道徳教育や特別活動を通して実施していく。

道徳教育は、学習指導要領解説に「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を 養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する」とあるように、子どもたちの人格形成をする上で重要な役割を担っていると考え。また、特別活動においては、学習指導要領の目標で「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする」「集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする」「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする 態度を養う」とあるように、よりよい人間関係を築くためのスキルや行動の仕方を実践的に身に付けることに重点を置いていると考える。

子どもたちに「誰一人取り残さない」との考えを育成するために、道徳教育の場において人間形成の基盤を養い、

＜道徳教育と特別活動の実践イメージ＞



特別活動の場において人間形成の基盤を柱に実践し、さらには道徳教育と特別活動を往還しながら子どもたちがよりよい人間関係を保てるスキルを学んでいくことが重要であると考え。

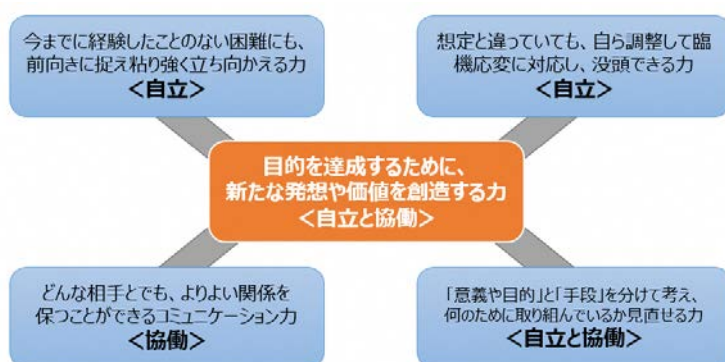
例えば、道徳の授業では、1つの物語から考える事象をみんなで話し合い、その価値について考える。通常の授業は、各学級で行われることが多いが時には学年全体でグループ分けをして行ったり学校全体で縦割りグループを作って話し合ったりなどすることができるようにしていきたい。また、特別活動では、各学級で行う「学級会」を通して「誰一人取り残さない」を合言葉に合意形成を図るスキルの基礎を身に付け、児童会や学校行事などで、そのスキルをさらに生かせるようにしていきたい。

(4) 意義や目的を的確にとらえ進むべき方向へ進むための教師の指導と支援

資質・能力の4つめとなる「『意義や目的』と『手段』を分けて考え、何のために取り組んでいるか見直せる力」を育むために、意義や目的を的確にとらえ、子どもたちが「今何をすべきか」を考えて進むべき方向に進んでいけるよう教師の指導と支援を強化していきたい。

(3) の取組にも重なる部分もあるが、例えば学級会で「クラスで団結できるイベントをやろう！」という議題でイベントの内容を話し合っていたとする。イベントの内容を決める際の合言葉は「誰一人取り残さない」となるが、何をもって「誰一人取り残さない」ことになるかを考えないといけない。この時「そもそもどうしてこんなイベントをすることになったのか」という一番大きな目的に立ち返ることが重要になってくる。「クラスでもっと一つになりたい!」「団結して行事に取り組みたい!」という目的であれば、全員が楽しめて一体となって頑張れる内容にするための話し合いをすることとなる。教師は、そうした意義や目的は何かを的確にとらえて、子どもたちの話し合いで目的が忘れ去られそうになったら、的確に指導・支援をして目的に立ち返らせるようにしていきたい。このような指導・支援ができるよう、具体的な場面などを想定して教職員研修を実施したり、普段から目的を意識して指導・支援するよう心掛けるなど、目的に立ち返る指導・支援のための工夫改善を行っていく。

(5) 子どもたちが目的を達成するまで最後まで頑張り切れるための温かい指導・支援(コーチング)



5つめの資質・能力「目的を達成するために、新たな発想や価値を創造する力」については、そのほか4つの資質・能力があって、育まれるものであると考えている。つまり、「目的を達成するために新たな発想や価値を創造する力」を中心に4つの資質・能力がつながっているといえる。

子どもたち自身が、目的を達成するために4つの資質・能力を駆使し、主体的に取り組むことがことによって、目的を達成するために新たな発想や価値を創造する力が生まれ、成就できると考えると、私たち教師は、子どもの何かを達成した時の嬉しそうな顔を想像しながら、5つ目の資質能力を育むために、子どもたちを最後まで温かく指導支援していかないとはいけなく強く思う。温かい指導をするために、「認める」「励ます」「支える」をキーワードとして、コーチングを主体とした指導・支援をしていく。

例えば、「STEAMS TIME」で遠くまで飛ぶ紙飛行機の開発をする授業をしていたとする。ある子どもがある一定の距離まで飛ばすことができたが、そこから行き詰っていたとしたら、教師は、支援するため「もっとこうしたほうがいいんじゃない？」等の具体的な方法を助言するかもしれない。そうではなく、紙飛行機が飛ぶ距離をここまで伸ばすことができたことを「認め」、ここまでできたからもう少し距離を延ばすことができると「励まし」、どうしたら伸ばすことができるのかを一緒に考え「支える」ことを教師が行えば、子ども自身が解決方法を導き出し距離を延ばすことができるのではないだろうか。「支える」場面では、ヒントを与えるのではなく「ここはどうすればいいかな？」など、考える視点を与えることがコーチングのポイントとなる。こうした「コーチング」についてのスキルを上げるために、教職員研修を充実するとともに、私自身が教職員を話す場面でコーチングによる指導・支援ができるようにしていきたい。

これからの10年先・20年先の社会を担う子どもたちのために、Well-beingな学校生活を実現することができるよう、不断の努力を重ねていく決意である。